3.2.4 カルマンフィルタ (KF) の数学的導出

まずは予測ステップの導出から始める。1 ステップ前の信念 $bel(x_{t-1})$ に、制御 u_t が加わったあとの信 念 $\overline{bel}(x_t)$ が計算できる。

$$\overline{bel}(x_t) = \int p(x_t|x_{t-1}, u_t)bel(x_{t-1})dx_{t-1}$$
(1)

$$= \int \mathcal{N}(x_t; A_t x_{t-1} + B_t u_t, R_t) \mathcal{N}(x_{t-1}; \mu_{t-1}, \Sigma_{t-1}) dx_{t-1}$$
 (2)

ただし、 $\mathcal{N}(x;\mu,\Sigma)$ は平均 μ 、共分散行列 Σ のガウス分布の x における確率密度を表す。具体的にガウ ス分布で表示すると

$$\overline{bel}(x_t) = \int \mathcal{N}(x_t; A_t x_{t-1} + B_t u_t, R_t) \mathcal{N}(x_{t-1}; \mu_{t-1}, \Sigma_{t-1}) dx_{t-1}$$

$$= \eta \int \exp\left[-\frac{1}{2} (x_t - (A_t x_{t-1} + B_t u_t))^T R_t^{-1} (x_t - (A_t x_{t-1} + B_t u_t))\right]$$

$$\exp\left[-\frac{1}{2} (x_{t-1} - \mu_{t-1})^T \Sigma^{-1} (x_{t-1} - \mu_{t-1})\right] dx_{t-1}$$
(4)

指数関数の積は肩の和を取ればよい。なので以下のように関数 L_t を使って書き換えられる。

$$\overline{bel}(x_t) = \eta \int \exp[-L_t] dx_{t-1}$$

$$L_t = \frac{1}{2} (x_t - (A_t x_{t-1} + B_t u_t))^T R_t^{-1} (x_t - (A_t x_{t-1} + B_t u_t))$$

$$+ \frac{1}{2} (x_{t-1} - \mu_{t-1})^T \Sigma^{-1} (x_{t-1} - \mu_{t-1})$$
(6)

 x_{t-1} に関する積分を実行するために、 L_t を x_{t-1} によらない項のみを含む部分 $L_t(x_t)$ と、 x_{t-1} による 項も含む部分 $L_t(x_{t-1},x_t)$ に分解する ($L_t(x_{t-1},x_t)$ は x_{t-1} によらない項を含んでもよい、なので一意な 分解ではない)。こうすると、この積分は

$$\overline{bel}(x_t) = \eta L_t(x_t) \int \exp L_t(x_{t-1}, x_t) dx_{t-1}$$
(7)

とかける。この積分だが、 L_t が x_{t-1} に関して 2 次式だったことを思い出すと、 x_{t-1} に関して「平方完 成」すればある x_{t-1} によらないベクトル ξ と行列 Ψ を用いて、 $\frac{1}{2}(x_{t-1}-\xi)^T\Psi^{-1}(x_{t-1}-\xi)$ の形に変形で きそうである。この形に変形できれば、 $\exp L_t(x_{t-1},x_t)$ の積分は多変量正規分布 $\mathcal{N}(x_{t-1};\xi,\Psi)$ の規格化 定数を求める積分と全く同じになり、特に x_t によらない定数になる。

この変形を行うため、あえて $L_t(x_{t-1},x_t)$ は x_{t-1} によらない項を含めても良いことにしている。 $\exp L_t(x_{t-1},x_t)$ の積分を多変量正規分布 $\mathcal{N}(x_{t-1};\xi,\Psi)$ の積分の形にもっていくために、この分布 $\exp L_t(x_{t-1},x_t)$ の頂点の座標 ξ を求める。頂点 ξ では、 $L_t(x_{t-1},x_t)$ はベクトル x_{t-1} のあらゆる方向に対して微分係数が

0 になっている。なので、 $L_t(x_{t-1},x_t)$ を x_{t-1} の各成分に関して微分したもの(この操作を「 L_t を x_{t-1} で微分」という)がすべて 0 となっている。

 x_{t-1} の第i 成分を $x_{i,t-1}$ とし、実際にこの計算を実行すると

第一項と第二項は和に使われている添字が違うだけで、全く同じ項である。第三項、第四項についても同 じである。結局

(共分散行列は対称なので添字を入れ替え、さらに A を転置。第四項も同様)

(14)

$$\frac{\partial L_t}{\partial x_{i,t-1}} = -A_{i\alpha}^T R_{\alpha\gamma,t}^{-1}(x_{\gamma,t} - (A_{\gamma\delta,t}x_{\delta,t-1} + B_{\gamma\delta,t}u_{\delta,t})) + \Sigma_{i\alpha}^{-1}(x_{\alpha,t-1} - \mu_{\alpha,t-1})$$
(15)

が得られるので、行列とベクトルの積を計算してまとめてかくと

$$\frac{\partial L_t}{\partial x_{t-1}} = -A^T R_t^{-1} (x_t - (A_{,t} x_{t-1} + B_t u_t)) + \Sigma_{t-1}^{-1} (x_{t-1} - \mu_{t-1})$$
(16)

 $L_t(x_{t-1},x_t)$ はベクトル x_{t-1} のあらゆる方向に対して微分係数が 0 になっている点 $x_{t-1}=\xi$ を求めた かったのだから、上の式がゼロベクトルと等しいとした方程式を x_{t-1} に関して解けばよい。

実際に変形をはじめるまえにもうひとつ別の量を計算しておく。 $L_t(x_{t-1},x_t)=(x_{t-1}-\xi)^T\Psi^{-1}(x_{t-1}-\xi)$ の形に変形する際のあらたな共分散行列 Ψ だ。 $L_t(x_{t-1},x_t)=rac{1}{2}(x_{t-1}-\xi)^T\Psi^{-1}(x_{t-1}-\xi)$ に変形できる ことを仮定すると、この行列は以下のように計算できる

$$\Psi_{ij}^{-1} = \frac{\partial^2 L_t(x_{t-1}, x_t)}{\partial x_{i,t-1} \partial x_{j,t-1}} = \frac{\partial^2 L_t}{\partial x_{i,t-1} \partial x_{j,t-1}}$$

$$(L_t(x_t) \mathrel{\texttt{id}} x_{t-1} \mathrel{\texttt{て微分してもゼロ}})$$

$$(18)$$

$$(L_t(x_t)$$
 は x_{t-1} で微分してもゼロ) (18)

$$= \frac{1}{2} \frac{\partial^2}{\partial x_{i,t-1} \partial x_{j,t-1}} (x_{t-1} - \xi)^T \Psi^{-1} (x_{t-1} - \xi)$$
(19)

$$= \frac{1}{2} \frac{\partial}{\partial x_{i,t-1}} \Psi_{j\alpha}^{-1} (x_{\alpha t-1} - \xi_{\alpha}) + \frac{1}{2} \frac{\partial}{\partial x_{i,t-1}} (x_{\alpha t-1} - \xi_{\alpha})^T \Psi_{\alpha j}^{-1}$$
 (20)

$$= \frac{1}{2}(\Psi_{ij}^{-1} + \Psi_{ji}^{-1}) \tag{21}$$

 Ψ は定義から共分散行列で対称行列で、対称行列の逆行列はまた対称行列になる $(1=(AA^{-1})^T=(A^{-1})^TA$ だから、 $A^{-1}=(A^{-1})^T$)ので両辺は等しい。なので Ψ を求めるため、 L_t をさらにもう一回微分する。